SDGsでつくる やわらかい未来

前ページではSDGsの成り立ちや、意味などを紹介しました。でも、17のゴールに書かれた「理想の世界」が実感として遠い気もします。

そこで、環境省の「SDGs人材育成研修事業検討委員会」の委員であり、SDGsの特集を組んでいる雑誌、ソーシャル&エコ・マガジン『ソトコト』の編集長でもある指出一正さんに、わたしたちはSDGsをどう実感として受け止めたらいいのかお聞きしました。

指出一正（さしで　かずまさ）

『ソトコト』編集長。1969年群馬県生まれ。上智大学法学部国際関係法学科卒業。島根県「しまコトアカデミー」メイン講師、静岡県「『地域のお店』デザイン表彰」審査委員長、上毛新聞「オピニオン21」委員をはじめ、地域のプロジェクトに多く携わる。内閣官房まち・ひと・しごと創生本部「わくわく地方生活実現会議」委員。環境省「SDGs人材育成研修事業検討委員会」委員。内閣官房まち・ひと・しごと創生本部「人材組織の育成・関係人口に関する検討会」委員。BS朝日「バトンタッチ SDGsはじめてます」監修。著書に『ぼくらは地方で幸せを見つける』（ポプラ新書）。趣味はフライフィッシング。
ソトコトオンライン：www.sotokoto-online.jp

市：結局わたしたちはどのようにSDGsを実感として受け止めれば良いのでしょうか。

指出：例えば、スーパーで買い物をしているときに夕方5時くらいになると生鮮食品がタイムセールで安くなって残っていますよね。それを買うのもSDGsです。そのままでは、廃棄されてしまうものを廃棄されないようにする。自分たちの生活の中でもったいないと感じることがSDGsにつながっていくんですね。

なので、誰かが今挙げたようなことをしたときに、応援したり、共感するということ、その気持ちにつながることが「誰一人取り残さない社会」をつくるうえで大切です。

SDGsはどこかの専門家に任せておけばいい話ではなくて、ぼくたちが少しでも、一粒でも、SDGs的なことを「いいな」と思う気持ちが増えていけば自然に持続可能な社会へとしっかり貢献していける、めっちゃハードルが低いものなんです。

SDGsは、すべて地域のこと

市：17のゴールは、崇高で、はっきりとつかみにくい感じがありますけど、実は身近な場所からスタートできるんですね。

指出：SDGsってグローバルに捉えられがちで、総論をみるとなんだか壮大なテーマに感じる人も多いと思います。でも、実はこれは全部、地域のことなんです。地域で起きている課題を解決するために国連が定めた目標なんです。

世界中のあらゆるローカル、つまり地域、例えば安中市に住んでいるのと全く同じ立ち位置にいる世界中のみんなを救うためのゴールだ、そう考えると安中市の皆さんが誰一人取り残されないで幸せになるためにSDGsはあるんだと理解できると思います。

市：SDGsの一見遠い理想をどう自分ごとにつなげるか、ということが大事なポイントですね。

指出：そうですね。なので、SDGsというのは誰かが掲げている遠くの社会の目標ではなくて、自分ごととして、誰一人取り残さずに、安中っていう素敵なまちをどうつくったらいいかを考えるときのひとつの指針になると思います。

市：年が明けてからのコロナ禍の中にあって、SDGsの捉え方は何か変わりますか。

指出：実はSDGsには、保健や衛生健康福祉系でも、ものすごく細かく項目が入っていて、新しいウイルスであったり、気候変動など全世界的に取り組まなければならないことも目標として書かれています。なのでSDGsが軌道修正するというより、SDGs的な社会への加速度を増さなければならない、という風に考えていいと思い